

ナルニア

ライオンと魔女と衣装だんす

CFNJ聖書学院ドラマクラス

キャスト

- *ナレーター -----
- *アスラン -----
- *ピーター -----
- *スーザン -----
- *エドモンド -----
- *ルーシー -----
- *タムナス -----
- *白い魔女 -----
- *ビーバー夫 -----
- *ビーバー妻 -----
- *教授 -----
- *サンタクロース -----
- *お母さん -----
- *マクレディ -----
- *モーグリム -----
- *魔女の手下 -----

- *アンサンブル1 -----
- *アンサンブル2 -----

- *脚本・演出 -----
- *音響・録画 -----
- *照明 -----
- *スポットライト -----

第一幕 プロローグ

ラジオの声：「こちらロンドン放送局 ただいまのニュースをお伝えします

昨夜 ドイツ軍による空襲が市内の各地で確認されました

子どもたちの安全を守るため 多くの家庭に疎開がすすめられています

どうか皆さま 速やかに避難の準備をなさってください」

お母さん：「ピーター！ 逃げる準備して！ 早く！」

～子供たちは急いで荷物をまとめる～

ルーシー：「お母さん！ どこに行くの？」

お母さん：「田舎の方よ 知り合いの教授がいるから その人のところに行くの」

ルーシー：「お母さんと離れるのイヤだ！」

お母さん：「お兄さんたちが一緒にいてくれるから」

ピーター：「戦争が終わったら戻って来れるから大丈夫！」

～逃げる 駅に着く～

お母さん：「大丈夫？ 寒くない？」

エド：「お父さんがいたら僕らを行かせないよ」

ピーター：「お父さんがいるってことは戦争が終わったってことだろ」

お母さん：「ピーターの言うこと ちゃんと聞くのよ」

お母さん：「みんなの世話をお願い」

ピーター：「わかってる」

お母さん：「頼むわね」

駅員：「間もなく発車します」

お母さん：「スーザン」「しっかりね」「それじゃ 行きなさい」

駅員：「間もなく発車します ご乗車はお急ぎください」

エド：「放して！ 汽車ぐらい一人で乗れるよ！ 放せってば！」

駅員：「切符を拝見します」

ピーター：「おいでルーシー 離れちゃダメだよ 大丈夫だ 心配いらないから おいで」

駅員：「出発進行！」

お母さん：「いってらっしゃい！」

ピーター：「母さん！ きっとすぐ会えるから」

子供たち：「大好きだよ」

「元気でね」

「バイバイ！」

「僕たちのことは心配しないでいいから」＊

第二幕 不思議なお屋敷

マクレディ：「カーク教授は子供と暮らすことに慣れていらっしゃるいません
それゆえ あなた方には いくつかのルールを守ってもらいます
大声を出さない 走らない 食器用のエレベーターで遊ばない
それから... 触らない！ とても貴重な芸術品よ そして くれぐれむを 教授のお邪魔をしないように」
教授：「お！君たちかね？ロンドンから来た子供たちは？
いや～ 本当戦争は恐ろしいもんじゃ この世の出来事とは思えん！
ところで君たちの名前はピーター スーザン エドモンド ルーシーであっているかね？」
「おお そっかそっか よく来た よく来た
マクレディさんにはもう会ったね？ わかんないことがあったら彼女に聞きなさい じゃ そんじゃ おやすみ」
子供たち：「おやすみなさい」

ピーター：「いいじゃん あのおじいちゃん ぼくらの好きなようにやらせてくれそうだね」
スーザン：「どうやら いい人のようだね」
エドモンド：「ちえ やめろよ！ そんな言いかた するなって！」
スーザン：「どんな言いかた？」
エドモンド：「そのお母さんみたいな言いかたのことだよ」
スーザン：「はあ... とにかく あなたはもう寝る時間よ」
エドモンド：「ぼくに寝ろって？ なにさまのつもりだい お姉ちゃんこそ寝ればいいじゃないか」
ルーシー：「ねえ そろそろ寝ないと おしゃべりしてるのが聞こえたら しかられちゃうんじゃない？」
ピーター：「だいじょうぶさ この家 でかいからたぶん聞こえないよ」
ルーシー：「え？なにになに？怖いんだけど...」
エドモンド：「ただの鳥だよ 怖がりだな」
ピーター：「大丈夫 フクロウだよ」
「さて もう寝ようかな そうだ あした探検しに出かけようよ
たぶんいろんな生き物がいるよ 森に行ったらシカがいるんじゃない？驚とか」
ルーシー：「アナグマも！」
エドモンド：「キツネも！」
スーザン：「ウサギさんも！」

第三幕 タムナスと会う

～次の日～

エドモンド：「おい... 雨降ってんじゃん」
スーザン：「文句言わないの エドモンド 待ってれば晴れるんじゃない？
それまで他の事していようよ 図書室に本もいっぱいあるみたいだし」
ピーター：「外行けなくても 家の中探検すればいいじゃん」
ルーシー：「いいね」＊
スーザン：「そうしましょう」＊

ナレーター：「子供たちはみんな大賛成でした こうしていよいよ あの冒険がはじまったのです
どこまで行っても行きどまりにならないくらい大きな家でしたから
思いもよらない場所があちこちにありました」
「開いている部屋や果てしなく続く廊下を走り回り 最後に全く人がいない部屋にたどり着きました
その部屋には大きな洋服だんす一つ以外は何もありませんでした」

ピーター：「なんもなさそうだね... 行こう」

～ルーシーは部屋に残り衣装ダンスの中に入る ナルニアに入る～

～タムナス登場～

ルーシー：「キャー！」
タムナス：「ワア！」「ああ... それ... ああ...」
ルーシー：「こんばんは」「隠れようとしてたの？」
タムナス：「いえ... あの... 私は... その... あ... いいえ 違うんですよ 私はその... あなたを脅かさないようにと思って...」
ルーシー：「ねえ 教えてくれる？ あなたは何？」
タムナス：「私は フォーンです あなたは何ですか？ そうか ドワーフだ 髭をそったドワーフ」
ルーシー：「ドワーフじゃないわ 女の子よ ドワーフみたいになっちゃうの クラスで一番大きいんだから」
タムナス：「それじゃ まさか イブの娘さん？」
ルーシー：「いいえ お母さんの名前はヘレン...」
タムナス：「いや でもあなたは 本物の人間？」
ルーシー：「ええ もちろん」
タムナス：「ハッ！ ここで何をしてるんです？」
ルーシー：「あのね 空き部屋の衣装だんすの中に隠れてて...」
タムナス：「その空き部屋って ナルニアですか？」
ルーシー：「ナルニア？」
タムナス：「うん そう」
ルーシー：「それ何？」
タムナス：「今いるここがそうですよ だからつまりあの街灯と 東の岸辺のケア・パラベルの城との間はナルニアなんです
木の枝も 石もツララも 何もかも 全部 ナルニアの中にあるんですよ」
ルーシー：「大きな衣装 ダンスね」
タムナス：「イショタンス？ あ！あの... すいません 名乗らせてください 私の名前は タムナス」
ルーシー：「初めまして タムナスさん ルーシー・ペページーよ」
タムナス：「あ... え？」
ルーシー：「手を握るの」
タムナス：「あ... どうして？」
ルーシー：「それは わからないけど... みんな誰かと会うとこうするの」

～握手する～

タムナス：「それではアキヘヤというとっても素晴らしい国にある
イショタンスという街から来られた ルーシー・ペペンシーさん 私のところへ お茶を飲みに来ませんか？」

ルーシー：「それはとても嬉しいんですけど... 私... そろそろ帰らなくちゃ」

タムナス：「あの 角曲がったすぐそこです 温かい火が燃えていますよ
えっとそれから トーストも紅茶もお菓子もあります それに もしよかったら イワシの漬物も」

ルーシー：「どうしよう...」

タムナス：「来てくださいよ 友達なんて滅多にできないんです」

ルーシー：「そうね それじゃ 少しだけ イワシの漬物があるなら」

タムナス：「山ほどありますよ」

タムナス：「あと少しです 家の中は暖かいですよ 大丈夫？」 「ここですよ どうぞ お先にどうぞ」

ルーシー：「ありがとう」

タムナス：「ちょっと待っててくださいね」

ルーシー：「うわぁ」

タムナス：「あっ それはね 私の父です」

ルーシー：「素敵な方ね あなたにそっくり」

タムナス：「いいえ... 私は父ほど立派じゃない」

ルーシー：「私のお父さんは戦争に行ってるの」

タムナス：「私の父も戦争に... まあ大昔のことですがね この広い冬が来る前です」

ルーシー：「冬は好きよ スケートしたり 雪合戦したり そうだクリスマスもあるし」

タムナス：「ありませんよ ここには もう百年もクリスマスを祝ってません」

ルーシー：「ほんと？ 百年もプレゼントなし？」

タムナス：「ええ クリスマスがないまま 長い冬が続いてます 夏のナルニアは素敵だったんですよ
私たちフォーンは 木の精たちと夜通し踊って それでもちっとも 疲れなかった
音楽が素敵でね～ また あの音楽... ちょっと お聞かせしましょうか？」

ルーシー：「ええ お願い」

～タムナス笛を吹く～

ルーシー：「帰らなくちゃ...」

タムナス：「もう遅いですよ」

ルーシー：「え？ どうして？」

タムナス：「ごめんなさい！」

ルーシー：「なんで泣いてるの？ ねえ！ タムナスさん？ 大丈夫？ どうしたの？ ねえ！ なんで泣いてるの!？」

タムナス：「僕が悪いフォーンだからです」

ルーシー：「そんな... あなたほど素敵なフォーンにあったことないわ」（ハンカチあげる）

タムナス：「それは他のフォーンを知らないからですよ 僕のお父さんだったらこんなことしてないですよ」

ルーシー：「え？ なにしたの？」

タムナス：「白い魔女に仕えることです」

ルーシー：「白い魔女？ 誰？ それ」

タムナス：「このナルニアを勝手に支配しているやつなんです
ここをいつも冬にしてクリスマスが来ないようにしているのもあいつなんです！
そいつに森の中で人間の子供を見つけたら捕まえて引き渡せと命じられているんです」

ルーシー：「でも あなたがそんなこと するとは思えないわ」

タムナス：「わからないんですか？今しているんです」

ルーシー：「え？どういうこと？」

タムナス：「今あなたを誘拐しているんです あなたを眠らせて 魔女のところに引き渡そうとしたんです
そうしないと しっぽ切られて 角も切られて 髭も抜かれて 最悪の場合石にされちゃうんです....」

ルーシー：「ごめんなさい... でもお願い 家に帰らせて」

タムナス：「そうします あなたに会うまで人間がどのようなものか知らなかったんです
今はもう 魔女に引き渡すなんかできません」

ルーシー：「どうしたらいい？」

タムナス：「行きましょう！」

「早く！ もう気づかれてるかもしれない 森はスパイだらけなんです
木が魔女に知らせるかもしれない ここからは帰れますね？」

ルーシー：「ええ たぶん」

タムナス：「よし」

ルーシー：「あなたは大丈夫？ ねえ ダメよ 泣かないで」

タムナス：「すみません 本当に 僕のこと赦してください」

ルーシー：「もちろんよ」

タムナス：「ありがとう」

ルーシー：「あげる あなたの方が必要なもの」

タムナス：「これから先 何が起きたとしても あなたと会えてよかった
この百年で 一番暖かな気分です さあ行って！ 早く！」

ルーシー：「大丈夫！帰ってきたわ！私大丈夫よ！」

スーザン：「え？何のこと？どうしたの？ルーシー」

ルーシー：「だって... 私がいなくてみんな心配していたんじゃないの？」

ピーター：「え？さっきその部屋から出てきたばかりじゃん」

ルーシー：「うそ？ 何時間もいなかったのよ」

ピーター：「どういうこと？」

ルーシー：「え？だって 朝たんすに入ってから何時間も何時間もたったじゃん
いろんなことがあったのよ お茶飲んだり お菓子食べたり」

スーザン：「ばかなこと言わないの ルーシー」

ピーター：「ばかなこと言っているわけじゃないもんね？ごっこ遊びしていたんでしょ？」

ルーシー：「ううん ピーター ちがうの！ あれ魔法のたんすなの
中に森があって 雪が降っていて フォーンとか魔女がいて ナルニアってところなの 来てみて！ ほら！」

スーザン：「なんもないけど？普通のたんすじゃん」

ピーター：「はい はい ごっこ遊びはまた今度な」

ルーシー：「ごっこ遊びじゃないわ」

スーザン：「いい加減にして ルーシー」

ルーシー：「でも 嘘じゃないもん」

エドモンド：「僕は信じるよ」

ルーシー：「本当？」

エドモンド：「当たり前だろ お風呂の棚にはサッカー場があるしね」

ピーター：「お前はいつもそれだ いちいち余計なこと言うのはよせ」

エドモンド：「ただの冗談だよ」

ピーター：「全く子供だな」

エドモンド：「うるさい！ お父さんでもないくせに！」

スーザン：「さすが頼りになるわね」

ルーシー：「でも 本当なの 嘘じゃない」

ピーター：「もういいよ ルーシー 終わりにしよう」

ナレーター：「それから数日間 ルーシーはひどく落ちこんでいました
『なにかもじょうだんでした』と兄弟たちに言う気になれたら
すぐにでもみんなと仲直りできたのでしょうけれど
ルーシーはとても正直な女の子でしたし 自分が正しいこともわかっていましたから
そんなことを言う気にはなれませんでした
みんなから ルーシーはうそをついていると思われるのはとてもつらいことでした
ある日ルーシーはもう一度だけ たんすの中をのぞいてみたいと思いました
自分でもあの出来事が夢だったのではないかと思い始めていたからです
でもその様子を 見つけてあとをつけている人がいました」

エドモンド：「ルーシー？ どこだ？ ここにいるのはわかっているんだぞ ばあ！
ルーシー 真っ暗にしちゃうぞ ルーシー？ ルーシー？」

「どこにいるの？ ルーシー？ 信じてあげなくてごめんよ 君が正しかった 仲直りしよう」

～白い魔女登場～

白い魔女：「とまれ！ お前は何者か？」

エドモンド：「ぼく... あの... エドモンドです」

白い魔女：「それが女王への口のききかたか！」

エドモンド：「ごめんなさい！ 女王だって知らなかったものですから...」

白い魔女：「ナルニアの女王を知らないだと！？ とにかくお前はなんなのだ？ 髭を切り落としたドワーフか？」

エドモンド：「いいえ 髭なんか生えたことはありません 僕は子供です」

白い魔女：「子供？ という事は... アダムの息子か？ ごちゃごちゃ言っていないではっきり答えろ！ お前は人間か？」

エドモンド：「はい 陛下」

白い魔女：「どのようにして わが国に入ったのだ？」

エドモンド：「あのう... 衣装だんすから来ました」

白い魔女：「ああ！？」

エドモンド：「あの... ドア開けたら ここに来てたんです」

白い魔女：「ドア！？」

エドモンド：「はい... 妹についてきたんですけど...」

白い魔女：「妹！？ 何人兄弟だね？」

エドモンド：「四人です ここに来たことがあるのはルーシーだけ フォーンに会ったと言っていました タムナスっていう
でもピーターもスーザンも僕も信じなかった」

白い魔女：「エドモンド 寒そうなこと こっちへおいで 何か 温かい飲み物は」
エドモンド：「いただきます 女王様」 「うわ... どうやって出したの？」
白い魔女：「望みは何でも叶えよう 何か食べたいものは？」
エドモンド：「ターキッシュ・デライト」

白い魔女：「エドモンド ぜひともお前の兄弟に会いたいものだ」
エドモンド：「どうして 普通の子供だよ」
白い魔女：「もちろんそうだろう お前ほどいい子が他にいるはずがない お聞きエドモンド
私には子供がいない お前のような子が欲しかった
お前なら いつか ナルニアの王子になれる その後は王に」
エドモンド：「本当？」
白い魔女：「ただし 兄弟がいないと」
エドモンド：「え？ それじゃあピーターも王様になるの？」
白い魔女：「違うそうではない 王には家来が必要だ」
エドモンド：「それじゃあ連れてきます」
白い魔女：「森の向こうの 二つの丘 私の館はあの間にある きっと気に入るだろう
どの部屋もみなお前の好きなターキッシュ・デライトでいっぱいだからね」
エドモンド：「今少しもらえませんか？」
白い魔女：「ダメ！！」 「食べ過ぎは 体に悪い それに私たちは またすぐに会えるではないか」
エドモンド：「そうですね 女王様」
白い魔女：「それではね 可愛い子 また会える日が待ち遠しい」

ルーシー：「エドモンド？ ああエドモンド 来たのね どう？素敵じゃない？」
エドモンド：「どこにいたんだよ」
ルーシー：「タムナスさんのところ あの人無事だったわ 私と会ったこと白い魔女は気づいてないみたい」
エドモンド：「白い魔女？」
ルーシー：「すごくひどい人なのよ 自分ではナルニアの女王だって言ってるけど 本当は違うの
みんなを石にしちゃったり 魔法をかけてナルニアをずっと冬にしてしまったのよ
だからいつまでも冬なのにクリスマスが来ないの ひどくない？」
エドモンド：「そんな白の魔女の話 だれから聞いたんだい？」
ルーシー：「フォーンのタムナスさんよ」
エドモンド：「フン！ フォーンの言うことなんか あんまりあてにならないよ」
ルーシー：「そんなこと だれが言ってるの？」
エドモンド：「みんな知っていることさ」
ルーシー：「てか 大丈夫？ 具合悪そう」
エドモンド：「当たり前だろ こんなに 寒いんだから どうやって帰るんだよ」
ルーシー：「来て こっちよ」

ルーシー：「ねえ！ ピーター！ピーター！起きて！起きて！ やっぱあったの！あったの！」
ピーター：「ルーシー 何の話だよ」
ルーシー：「ナルニアよ やっぱ衣装だんすの中にあったの」

スーザン：「夢を見たんでしょ ルーシー」
ルーシー：「違うもん またタムナスさんに会ったの 今度はエドモンドも行ったのよ」
ピーター：「お前も フォーンを見たのか」
エドモンド：「ルーシーの空想に付き合ってたんだ ごめんねピーター 相手にしなきゃよかった
もちろん冗談だよ そんなのほんとうにあるわけないもん」
「ほらまた泣いちゃったよ ちっちゃい子はこれだから困るよ すぐ泣くんだから」
ピーター：「お前が意地悪したからだろう いつもそうやって小さい子にひどいことする
学校でもそうじゃないか」
スーザン：「もうやめて！二人で喧嘩したって何も始まらないわ！
でも困ったわね... 今までルーシーこんな感じじゃなかったのに」
ピーター：「教授に相談してみようかな もう僕らの手には負えないよ」
スーザン：「そうね... そうしましょう」

教授：「フム.. それで？」
ピーター：「だから 困っているんです」
教授：「どうして妹さんの話が本当ではないとわかるのかね？」
スーザン：「え？」
ピーター：「でも... エドモンドはごっこ遊びしてただけだっていったんです」
教授：「そこだね そこをちゃんと考えないと
きみたちのこれまでの経験から弟さんと妹さんのどちらがより信頼できると思うかね？
つまり どちらがより うそをつかないか？」
スーザン：「そこがへんなんです 先生 普段はルーシーは嘘をつくような子じゃないんです
でもこんなことはありえないじゃないですか たんすのなかに森だとかフォーンだとか...」
教授：「それはどうだろうね それにいつも信頼できると思っていた人を
うそつき呼ばわりすることはとても深刻なことだ じつに深刻なことだよ」
スーザン：「いや... うそをついてるわけじゃないと思うんです どこがおかしくなってしまったんじゃないかと...」
教授：「頭がおかしくなったのかもしれないということかね？ それなら心配はいらない
あの子のようすを見ても 話をしても あの子の頭がまともなことは明らかだ」
スーザン：「でも... 論理的に考えてあり得ません」
教授：「論理！？ まったく最近の学校はなにを教えているのやら... 論理的に考えるとこうだ！ 可能性は三つしかない
いち！妹さんがうそをついているか に！妹さんが頭おかしくなったか さん！本当のことを言っているかだ
妹さんがうそを言わないことはきみたちが知っているだろう？ じゃこれはない！
頭がちゃんとしていることも明らか！
だとしたら本当のことを言っているとしか考えられないんじゃないかね？」
ピーター：「でも ありえないじゃないですか」
教授：「なぜそんなことを言う？」
ピーター：「だってまず 本当だとしたら どうしてみんながああの衣装だんすのところに
行ったとき見つけられなかったんですか？」
教授：「だからどうだと言うんだね？」
ピーター：「だって先生もし本当なら いつだってそれはそこにあるわけでしょう？」
教授：「そうかね？」

スーザン：「だとしても ルーシーがどこかに出かけてもどってくる時間なんてなかったんです
私たちが部屋から出た瞬間に 私たちを追いかけてきたんですよ
1分もたっていないのに あの子は何時間もいなかったふりをしたんです」

教授：「それこそまさに 妹さんの話が本当かもしれないと思わせるところだね
もしこのやしきに どこか別世界に通じるドアがあるとしたら
そしてもし 仮に妹さんが別世界に行ったとしたら
その別世界にはまったく別の時間が流れていたとしてもおかしくはなからう
だから そこにどんなに長いこといても こちらの時間にしたら これっぽっちもかからんというわけだ
あの子の年で そんな考えを自分で思いつける女の子はそうはあらんだろう
もしごっこ遊びをしていたのだとすればしばらく長い時間隠れてから 出てきてその話をしたんじゃないかね」

ピーター：「でも先生 本当に別世界がありうるとおっしゃるんですか？」

教授：「その可能性が高い」

スーザン：「じゃ どうしたらいいんですか？」

教授：「いい方法 教えてやろうか？ 気にしないこと！ww それじゃおやすみ！」

第四幕 森の中へ

ピーター：「さーて 今日は何をしようかな？マクレディさんにも
お客さんが来ている時 邪魔しちゃいけないって 言われてたしな...」

スーザン：「ねえ！みんな大変！マクレディさんがお客さんを連れてこっちに來たわ！」

ピーター：「ヤバい！走れ！」

「仕方ない！ここに隠れよう」

ルーシー：「足踏まないで！ さっきから踏んでる！ イヤー！ いたーい！」

エドモンド：「 踏んでないよ！ 誰だよ押してるの！ いたい！」

ピーター：「 押すなよ！ 下がれ！ ほら押すなって！ なんだ？」

スーザン：「 ねえちょっと！ ああ！ 寒くない？」

ピーター：「ごめん！ルーシー 信じてあげられなくて 仲直りしよ」

ルーシー：「いいよ」

スーザン：「ねえ これからどうするの？」

ピーター：「それは ルーシーが決めるべきだ」

ルーシー：「やったー！ じゃタムナスさんに会いに行かない？」

ピーター：「よし！ じゃそうしよう」

スーザン：「でもこんな格好じゃ 雪の中は歩けないわ」

ピーター：「そうだな きっとこれを借りても教授は気にしないよ だいたいさ考えてみる
論理的に ダンスから出したことにはならないだろう？」

エドモンド：「これ 女ものじゃないか！」

ピーター：「わかってる」

エドモンド：「ねえ 道こっちじゃないの？」

ピーター：「お前やっぱ来たことあるじゃん！なんで嘘ついてたんだ？」

エドモンド：「自分だって信じなかったくせに」

ルーシー：「もういいの 行きましょう」

ルーシー：「おいしい食べ物がいっぱいあってね すごく！ いっぱい...」

ピーター：「どうした？」

スーザン：「ルーシー」

ルーシー：「誰がこんなひどいことしたの？」

ピーター：「『フォーンのタムナスを 反逆罪の容疑で逮捕する

ナルニアの女王ジェイディス陛下の敵である人間と 親しくしたためである

女王秘密警察長官 モーグリム 女王陛下万歳！』」

スーザン：「もういい 私たち本当に帰らなきゃ」

ルーシー：「タムナスさんはどうなるの？」

スーザン：「人間とただで捕まったのよ 私たちじゃ助けられない」

ルーシー：「その人間が 誰かわからない？ 私のことなの 私を逃がしたから捕まったの」

ピーター：「警察に届けよう」

スーザン：「警察に捕まったのよ」

ピーター：「大丈夫だよ 何か手を考える」

エドモンド：「どうして？ だって犯罪者だろう？」

～鳥現れる～

ルーシー：「ねえ 鳥さん 教えてくれない？

フォーンのタムナスさんはどこに連れていかれたの？」

「ねえ みんな この鳥 私たちについて来いって言っているんじゃない？」

スーザン：「たしかに...」

ピーター：「よし！ついて行ってみよう」

～歩き出す～

エドモンド：「ねえ ピーター この鳥のこと知らないだろ 罠かもしれないじゃん」

ピーター：「絶対いい人でしょ 全然悪そうに見えないじゃん」

エドモンド：「だとしても フォーンが正しくて 女王が悪い魔女だってどうしてわかるんだい？

どっちがどっちか ぼくたちにはわかんないだろ？」

ピーター：「フォーンは ルーシーを助けてくれた」

ルーシー：「ねえ見て！なんかいる！」

スーザン：「キャー！」

ピーター：「大丈夫 ビーバーだよ しっぽ見えたから」

スーザン：「気を付けて！」

ピーター：「大丈夫だよ もし悪いビーバーだったとしても こっちは四人もいるから」

ビーバー夫：「あなたがたは アダムの子と イブの子ですか？」

エドモンド：「うわ！しゃべった！」

ピーター：「はい... たぶん」

ビーバー夫：「シッ！シー そんなに大きな声を出さないでください ここだって 安全ではないんです」

ピーター：「なにを そんなにこわがっているんですか？ ここにはぼくたちしかいませんよ」

ビーバー夫：「木がいます」

「木はいつも聞き耳をたてていますよ まあ大体はこっちの味方なんですけどたまに裏切者がいるんですよ」

エドモンド：「こっちの味方って言うても きみがぼくらの味方かどうかどうやってわかるんだい？」

ビーバー夫：「たしかに これがしるしです」

ルーシー：「あっ あたしのハンカチ タムナスさんにあげたやつ」

ビーバー夫：「そうなんです かわいそうに 逮捕される前に気づいたのか これを私にわたしてくれました
自分の身になにか起きたら 私があなたがたにお会いして お連れするようにと 行き先は！」
～近づくように合図～
「アスランのところです！ ひょっとしたらもう上陸なさったかもしれない」

ナレーター：「アスランの名前を聞いたとたん 子どもたちのだれもが 胸がどきどきするのを感じました
エドモンドはぞくぞくっとわけのわからないおそれを感じました
ピーターは急に勇気がわいてきて冒険がしたくなりました
スーザンはなにかおいしそうなおいとおもしろい音楽が自分のそばを流れたように感じました
ルーシーは朝 目をさましてみたら夏休みが始まったと気づいたときのようにうれしく感じました」

ビーバー夫：「それではみなさんを ゆっくりお話しできる場所に ご案内します 食事もありますよ」
「足元気を付けてくださいね ほらこっち こっち」

スーザン：「素敵なダムね」

ビーバー夫：「いやー そんなー たいしたことないですよww まだ完成してないんですけどね」
「はい！着きましたー！ あ そこの水漏れは気にしないでくださいww
ここが おうちです」

ビーバー妻：「あ！な！た！ 帰って来てるの？」

ビーバー夫：「ただいま！ハニー！ お客さん連れてきたよ！」

ビーバー妻：「あなた！遅いじゃない！心配してたのよ！であんたいつ水漏れの修理してくれるの？
今日やってくれると思ったのに...アダムの子とイブの子？」

ビーバー夫：「そうですよ！ミセス・ビーバーさん」

ビーバー妻：「おお！オッホッホッホッホ！ ついに来たー！」

ビーバー夫：「そう！そう！そう！」

ビーバー妻：「待って待って待って 冷静にならないと」

ビーバー夫：「確かに！家に入ってゆっくり食事しながら...」

ビーバー妻：「ギャー！！ もうほーんと最高！よく来たね！
さあさあさあ！入って！入って！ちょうどね ジャガイモ茹でていたところなの」

ビーバー夫：「え？それって今鳴ってる鍋のこと？」

ビーバー妻：「そうそう！それ いやーもう本当信じられない 素敵ー！」

ビーバー夫：「ねえ ハニ ハニー」

ビーバー妻：「もう どうしたのよ？」

ビーバー夫：「（小声で）これ... 焦がしてるよ わかった！ やっとく！ やっとく！」

ルーシー：「ねえ！ タムナスさんに何が起ったのか教えてくれない？」

ビーバー夫：「えっとね... ほんと酷い話なんだけど あいつの館に連れていかれたのは間違いないですね」

ルーシー：「白い魔女の？」

ビーバー夫：「そうそうそう あそこに入って出てこれた人は いないんですよ」

ルーシー：「ピーター 何とかしないと...」

ビーバー妻：「でも助けに入るなんて無理じゃない？」

ビーバー夫：「ああ！ 無理無理」

～ルーシー半泣き～

ビーバー妻：「ああ ちがうのちがうの つまり 勝手に入ることが出来ないって事

まあ生きては出てこれないだけだね」

～ルーシー大泣き～

ビーバー夫：「ミセス！ ビーバー！」

ビーバー妻：「ごめん...」

ビーバー夫：「大丈夫 大丈夫 まだ希望はあるよ」

ビーバー妻：「あるよ～」

ビーバー夫：「だって アスランが動き出しているんですから！」

スーザン：「アスランって誰？」

ビーバー夫：「ワッハッハー アスランって誰だとさ とぼけちゃってこの子はまた...

え？ 知らないんですか？ 王様ですよ！ あの方こそナルニアの真の王です！

ビーバー妻：「しばらくいらっしゃらなかったんですけどね でも 戻ってきたんです このナルニアに

あの方はちゃんと白い魔女をやっつけてくれますよ

タムナスさんを救うのはあなた方ではなく アスランです」

エドモンド：「アスランは石にされないの？」

ビーバー夫：「ワッハッハー あの方を石にするって？ www そんなバカなwwwww」

ビーバー妻：「魔女はそんなことできませんよ アスランを目にしたら立っているのも やっとだと思えますよ

古い歌でこんな歌があるんです

アスラン ラララ 正義の味方 ガオゥと ほえれば悲しみ 消える

むき出す牙に冬は死に たてがみ ゆらら 春が来る

会ったらきくとわかりますよ」

スーザン：「でも どうやって会うの？」

ビーバー夫：「私が案内します そのために連れてきたんですから」

ルーシー：「アスランって 人間？」

ビーバー夫：「ワッハッハー アスランが人間だって？ www ああ うけるwwwww」

ビーバー妻：「違いますよ あの方は 森の王であり 偉大なる海のかなたの皇帝のご子息です

百獣の王って聞いたことありませんか？ アスランは ライオンです

そう！ 立派な 偉大なライオン」

スーザン：「ライオン？ 危なくないの？」

ビーバー夫：「そりゃ危ないさ！ でも良い方なんだ！ 王様だからね」

ピーター：「じゃ そのアスランに 会ってみたいです」
ビーバー夫：「そうしましょう！明日石舞台に行きましょう！そこでアスランが待ってますよ」
ルーシー：「でもタムナスさんはどうするの？」
ビーバー妻：「さっきも言ったけどね お嬢ちゃん タムナスさんを助ける一番早い方法はアスランに会う事なのよ
あー ねえ ダーリン」
ビーバー夫：「はい ダーリンです」
ビーバー妻：「ちょっと待ってね ヨイッショ！ヨイッショ！ヨイッショ！ねえ ダーリン」
ビーバー夫：「はい どうしたの？」
ビーバー妻：「（小声で）あの予言のこと教えてあげた方がいいじゃない？」
ビーバー夫：「え？なに？聞こえない」
ビーバー妻：「（大声で）よ！げ！ん！」
ビーバー夫：「ああ 予言ね」
スーザン：「予言で何？」
ビーバー夫：「昔からの予言があるんですよ
『アダム肉とアダム骨が ケア・パラベルの玉座についたとき
それが悪しき時代のおわりとき』」
ビーバー妻：「そうそうそう つまりアダムの息子二人とイブの娘二人が ケア・パラベルの四つの玉座に座ったとき
白い魔女の統治が終わるんです そしたらタムナスさんも自由になりますよ」
ピーター：「それが僕らってこと？」
ビーバー夫：「もちろん！すでにアスランが戦いの準備をしていますよ」
ルーシー：「戦い？」
スーザン：「戦争に巻き込まれないように 疎開してきたのに だから早く帰ろうって言ったのよ」
ピーター：「こんなことになるとは思わなかったんだもん」
ルーシー：「ねえ待って！エドモンドはどこ？」
ピーター：「エドモンド？ エドモンド？ エド！？」
スーザン：「どこ行ったのかしら...」
ピーター：「わかんないよ！」
ビーバー夫：「あの... エドモンドは前にナルニアに来たことがありますか？」
ピーター：「エドモンド！ エドモンド！」

第五幕 魔女の館

エドモンド：「もうほんとあいづらむかつく！自分勝手にわがままなんだから！
みーんな女王のことも悪く言うし 会ったこともなくせに
僕には優しくしてくれたし... とにかくみんなよりずっと僕に優しくしてくれたもん
怖いライオンより全然マシだよ」
モーグリム：「動くな！誰だ！名を名乗れ！」
エドモンド：「ごめんなさい！ 僕エドモンドです！女王陛下に会いに来たんです」
モーグリム：「では入れ 女王に気に入られてよかったな 本当によかったかどうかはわからんが」

エドマンド：「やってきました 陛下」
白い魔女：「エドマンド 兄弟も一緒か？」
エドマンド：「いいえ」
白い魔女：「連れて来いと言ったはずだ お前の兄弟を」
エドマンド：「ええ 言われました だから...」
白い魔女：「ではなぜ！お前はたった一人でここに来たのだ」
エドマンド：「ごめんなさい」
白い魔女：「こんな簡単なことがなぜできない！」
エドマンド：「僕の話聞いてくれなくて...」
白い魔女：「それもできないと？」
エドマンド：「近くまでは連れてきました ビーバーのところにいます ダムのところの」
白い魔女：「ビーバー？」
エドマンド：「はい でも他のところに連れて行くって言っていました」
白い魔女：「どこだ？」
エドマンド：「アスランのところです」
白い魔女：「アスラン？ 嘘をついたらただでは済まないからな！」
エドマンド：「嘘じゃないんです！本当なんです！」
白い魔女：「そりを用意しろ！」
魔女の手下：「はい！閣下！」
エドマンド：「あの... 約束通りターキッシュ・デライトもらえませんか？」
白い魔女：「（小笑い）おい！ お客様がおなががすいたんだとww」
魔女の手下：「こっちにうまいもんがあるぞww ガッハッハー」
白い魔女：「モーグリム！」
モーグリム：「はっ！」
白い魔女：「何をすべきかわかっているな」
モーグリム：「はい！閣下！ アオー！！！！」

ピーター：「エドマンド！ エドマンド！」
スーザン：「エドマンド！ どこにいるの？」
ピーター：「いた？」
スーザン：「いないわ ああ こんなところ 来なきゃよかった」
ピーター：「みんなで探しに行こう！」
ビーバー夫：「無駄ですよ！ 彼は白い魔女のところに行ったんですよ みんなを裏切ったんです！」
スーザン：「だとしたら 追いかけてくちゃ！」
ビーバー夫：「だめ！だめ！だめ！」
ルーシー：「でも兄弟なのよ」
ピーター：「そうです 見捨てることなんてできません！」
ビーバー妻：「わからないんですか？ 魔女は あなたたち四人を捕まえたくてうずうずしているのよ
あなたたちがケア・パラベルの王座に座らないように
四人とも魔女の館に入ったら むこうの思うつぼです すぐ石にされちゃいますよ
でも一人だったらみんなを捕まえるためのおとりとして生かしておくと思います」

ルーシー：「ああ だれか助けてくれる人はいないの？」
ビーバー夫：「アスランだけです！ 会いに行きましょう もうアスランにたよるしかありません」
ピーター：「じゃ行こう！」
ビーバー夫：「えっとね... 道は確か... こっち！」
ビーバー妻：「ちょっと待って！ あなたあのハム降ろしてちょうだい あとだれかパンも持ってきて」
スーザン：「何してるんですか！？」
ビーバー妻：「お弁当作ってるのよ 長い旅になるのに お弁当持って行かなくちゃ困るでしょ？」
スーザン：「でも、時間がないんです！ もう 魔女が来ちゃう！」
ビーバー妻：「えっと！ きれいなハンカチと それからえっと...」
ビーバー夫：「もう行くよ！ ミセス・ビーバー」
ビーバー妻：「あなた！ 急かさないで！ 今集中しているの！ えっと ろうそくも必要で... それから...」
ビーバー夫：「ミセス！ ビーバー！」
ビーバー妻：「あゝ！！このミシン持ち運ぶのには重過ぎる」
ビーバー夫：「そんなの逃げるのに必要ないでしょ？」
ビーバー妻：「だって！ 魔女にいじられると思うだけでイヤなの！」
ビーバー夫：「わかった！ わかった！ 俺が持っていくよ！ うっわ！ おっも！ 重すぎるだろこれ...」
ビーバー妻：「何しているの？ 元に戻して 早く行かないと置いていくわよ」
ビーバー夫：「？？？」

ビーバー妻：「ああ もう...」
ビーバー夫：「何してるの？」
ビーバー妻：「鍵かけてるの」
ビーバー夫：「なんで？」
ビーバー妻：「時間稼ぎができるでしょ？」
～オオカミの遠吠え～
ビーバー妻：「やっぱり無理！！」
ビーバー夫：「もう どこ行くの！？」
ビーバー妻：「ミシンが盗まれちゃう！」
ビーバー夫：「そんなわけない！」
ビーバー妻：「だって！ 彼女が来て 私のミシンを盗んで このきれいな刺繍が編める...」
ビーバー夫：「シャー！！！」
ビーバー妻：「そうね そうね はいはい 私が優先順位間違ってた 行きましょう 早く早く」
ビーバー夫：「ほんとだよ もう... 食べられちゃうよ！！」

第六幕 サンタクロース

ビーバー夫：「ハニー もうすぐだよ！ 急いで！」
ビーバー妻：「ああ！ もう！ 無理！ これ以上もう歩けない！！」
ビーバー夫：「わかったよ！ じゃ今日はあそこで泊まろう」
ピーター：「ここはどこですか？」
ビーバー夫：「古いビーバーのかくれ場所の洞窟です たいしたところではないですが 数時間眠らないと」

ビーバー妻：「寝る！？ 出発するときあんなに急かさなかったら 枕ぐらい持ってきたのに」

ビーバー夫：「枕？ それで死んじゃったら何の意味があるの？」

ビーバー妻：「快適になれる」

～鈴の音～

ビーバー夫：「待って 聞こえる？ 魔女のそりの音かも...」

ビーバー妻：「え！？ あいつミシン持ってる？ ...え？なんか私変なこと言った？」

ビーバー夫：「私が見に行きますので みんな待っていてください」

ビーバー妻：「あなた気を付けてね！ 忍び寄るの得意じゃないでしょ？」

ビーバー夫：「ご心配どうも」

ビーバー妻：「ああもう心配だわ 魔女に捕まったらどうするの...」

ピーター：「心配する必要ないと思いますよ 大丈夫ですビーバーさん」

ビーバー妻：「そうね... ポジティブに考えないと...」

ビーバー夫：「ワァー」

ビーバー妻：「ああ！！捕まったんだわ！あなた！死んじゃった...！！！ワーン！」

ビーバー夫：「みんな出て来てください！！」

ビーバー妻：「なんか 声だけ聞こえるんですけど...」

ビーバー夫：「僕は死んでません いいから みんな出て来ててください！

ああ！最高！白い魔女の魔法が弱くなってきた！」

ピーター：「どういう意味ですか？」

ビーバー妻：「ご存じの通り あいつのせいでここはいつも冬なのにクリスマスが来ないって言ってたじゃないですか

でも 見てください！」

～サンタ登場～

サンタ：「こんにちわ～ 皆さんメリークリスマス！！

あいつの魔法のせいでね なかなか来れなかったんですけど やっと来ました～

はい！それではプレゼントの時間でーす」

女子：「プレゼント！！？？やったー！」

サンタ：「ミセス・ビーバーさん あなたには 新品のミシンをあげましょう」

ビーバー妻：「キャー！！やったー！！ありがとうございます。」

サンタ：「家に送り届けますね」

ビーバー妻：「でも家鍵かけてきたんですけど 大丈夫ですか？」

サンタ：「大丈夫！大丈夫！だって僕はサンタクロースですからww」

「ハイ次はミスター・ビーバーさん あなたには 新しいダムをあげましょう

家帰ったら きれいに直ってると思いますよ」

ビーバー夫：「イエーイ！！やったー！！ありがとうございます。」

サンタ：「では次は子供たち まずはアダムの子供 ピーター

これは君へのプレゼントだよ おもちゃじゃないよ 本物の武器

これを使う時が まじかに迫っている」

「次はイブの娘 スーザン 君にはこれをあげよう

これは放てば外れることがない それとこれを吹けば どこでも助けが来る」

「最後にイブの娘 ルーシー これは火の花のしずくで作った薬だよ
一滴でどんなけがも治る あとこれは使わないことを願うが 護身用だ」
子供たち：「ありがとうございます」
サンタ：「はい！それではメリークリスマス アスラン万歳！」
みんな：「メリークリスマス！」

第七幕 アスランの陣営

ビーバー夫：「はい！皆さん 着きましたよ！アスランのキャンプ場です」
「どうぞ前へ」
ピーター：「いえいえ お先にどうぞ」
ビーバー夫：「いやいや 動物よりもアダムの子息さんが先です」
ピーター：「スーザン きみはから行ったら？ レディー・ファーストってことで」
スーザン：「なに言ってるの いちばん年上はあなたでしょ」
ピーター：「行くよ... ただいままいりました アスラン」
アスラン：「ようこそ ピーター アダムの子息よ ようこそ スーザンにルーシー イブの娘たちよ
そしてようこそ ビーバー殿 並びにご夫人 だが四人目はどこだ？」
ピーター：「そのことで来ました 助けてください 弟は白い魔女に捕まったんです」
アスラン：「捕まった？ なぜそのようなことに？」
ビーバー夫：「エドモンドは 兄弟を裏切ったのです」
ピーター：「僕が悪かったんです 厳しくしたから...」
ルーシー：「お願いします アスラン エドモンドを救うことできませんか？」
アスラン：「あらゆる手を尽くそう だが思いのほか 難しいかもしれぬ」
「まずは ごちそうのしたくだ このイブの娘たちをテントにおつれし お世話をしなさい」
「おいで アダムのむすこよ きみが王となる城を遠くから見せてあげよう」
「あれこそが 四つの玉座があるケア・パラベルだ その玉座のひとつに君が王として座わらねばならない
君にあれを見せたのは 君がいちばん年上で ほかのみんなをしたがえる最高の王となるからだ」
「妹さんの角笛だ」「もどれ！王子にはじめての手がらを立てさせてやれ」

～ピーターオオカミと戦う～

アスラン：「急げ！ オオカミがもう一匹いるぞ そこだ！うしろだ！ 追えみんな やつは主人の魔女のところへ行くぞ
このチャンスをつかんで魔女を見つけ出し 四人めのアダムのむすこを救え」
「ピーター剣をぬぐいなさい」
「立て オオカミ退治のピーター卿 ナルニアの騎士よ」

第八幕 魔女の訪問

魔女の手下：「もう無駄ですよ 奴らはもうすでに着いてますよ
ですがこいつは 生かしておいておいたほうがよさそうですね」

白い魔女：「それで やつらに助け出させようというのか！？」

「だったら早く始末した方がいい」

エドモンド：「お願いします やめてください 助けて！」

～アスランの兵たちが助けに来る～

アスラン：「君たちの兄弟だ エドモンドは十分反省している 過ぎたことを話す必要はないぞ」

エドモンド：「ごめんなさい」

ピーター：「いいんだよ」

ビーバー妻：「大変です！魔女がアスランに会いに来ました！」

白い魔女：「ここには裏切り者がいるようだな」

アスラン：「お前を裏切ったわけではなかろう」

白い魔女：「深遠なる魔法を忘れたのか？」

アスラン：「忘れるわけがない 掟を定めた魔法は目の前で記されたのだ」

白い魔女：「では覚えているな 裏切り者の命はすべて 私に捧げる決まり」

ピーター：「力ずくで取ってみろ」

白い魔女：「お前ごときが我が権利を奪えると思うか？ もし掟を破れば アスランも知っての通り

このナルニアは 滅びることになる 火と水のうちに 消え去るのだ

あの子供は 死なねばならぬ 石舞台の上で 掟に従って 嫌とは 言わせぬぞ」

アスラン：「そこまでだ 二人だけで 話したい」

～アスランと魔女二人で話す～

アスラン：「魔女は 君たちの兄弟の血を要求することをあきらめた」

白い魔女：「お前の約束は確かだろうな...」

アスラン：「ガオーオー！！」

みんな：「アスラン 万歳！！」

第九幕 魔女の勝利？

スーザン：「あなたも寝れないの？」

ルーシー：「うん... なんか怖いの 嫌な予感がする」

スーザン：「うん... 実は私も...」

ルーシー：「アスランに何か起こる気がする...」

スーザン：「今日様子おかしかったもんね... 急にいなくなったりしないよね？...」

ルーシー：「今どこにいるんだろう？」

スーザン：「探してみしよう」

アスラン：「ああ 子供たち 子供たちよ なぜついてくるのだね？」

ルーシー：「眠れなくて...」

スーザン：「お願いアスラン 一緒に行かせて」

アスラン：「しばらくそばにいてくれると嬉しいよ　ありがとう」

「うめき声」

ルーシー：「アスラン？　ねえアスラン？　どうしたの？」

スーザン：「具合が悪いの？アスラン」

アスラン：「いや　悲しくて心細いのだよ　たてがみに手を置いてくれ

きみたちがいっしょだと感じられるように　そうやって歩いて行こう。」

「君たちはここまでだ　ここから先は私一人で行く」

スーザン：「でも　アスラン...」

「私を信じなさい　これはやらなければいけないのだ

どんなことがあっても　姿を見せてはならないよ　ありがとうスーザン　ありがとうルーシー　さようなら」

白い魔女：「愚か者が来た！」

「縛り上げろ」

「待て！　まず毛を剃り上げてしまえ」

魔女の手下：「あら　猫ちゃん　かわいそうに」

「今日はなん匹　ネズミをつかまえた？」

「ミルクを飲むかい　にゃんこちゃん？」

白い魔女：「アスランよ、　愚かな奴だ　こんなことで裏切り者の人間を救えると思ったのか

お前は命を失うばかりか　誰も救えないのだ　フッ！　愛など意味はない

明日から　このナルニアは永遠に　我らのものだ　どうだ　分かったか？　諦めろ

そして　絶望して死ねー！！！」

「偉大なる猫は　死んだ！！！！」

「将軍　戦いの用意を整えろ」

～魔女の軍勢がいなくなってスーザンとルーシーが歩み寄る　泣く～

～ルーシーが薬飲ませようとする～

スーザン：「もう遅いわ...　死んだのよ」

ルーシー：「ねえ...　これ外しましょう」

スーザン：「もう朝だわ...　行かないと」

ルーシー：「寒い...」

スーザン：「おいで」

～大きな音がしてアスランが消える～

ルーシー：「ねえ！　みて！　アスランは？」

スーザン：「何が起きたの？」

～アスラン登場～

女の子：「アスラン！！」

ルーシー：「死んだんじゃないの？ アスラン」

アスラン：「魔女が犠牲の本当の意味を知っていたなら 魔法を読み違えることはなかっただろう

何の裏切りも犯さない者が 犠牲となって 代わりに殺された時 石舞台は砕ける

そして死さえ 振り出しに戻るのだ」

スーザン：「あなたが死んだってことを知って ピーターとエドモンドが戦いに出たんです」

ルーシー：「助けなくちゃ」

アスラン：「もちろん 助けるが 味方を増やそう 背中に乗って 行き先は遠い だが時間はない 耳を塞いでおきなさい」

第十幕 タムナスの復活と戦い

ルーシー：「タムナスさん！タムナスさん！ アスランこっちよ！」

タムナス：「おお ルーシー おお 王様！」

アスラン：「来なさい 囚われている人を探そう 全て見つけ出すのだ ピーターの助けは多い方がいい」

～戦いのシーン～

アスラン：「全て終わった」

ビーバー夫：「アスランの勝利だ！」

アスラン：「みんなよくやった」

ピーター：「エドモンドのおかげなんです アスラン 魔女の杖を壊してくれたおかげです」

スーザン：「ルーシー急いで！」

～エドモンド回復 みんな喜ぶ～

アスラン：「ルーシー 急ごう 他にもけがしている人がいる」

アスラン：「王冠を持てきなさい

きらめく東の海には 勇ましき女王 ルーシー

大いなる西の森には 正義王 エドモンド

輝ける南の太陽には 優しき女王 スーザン

そして澄み渡る北の空には 英雄王 ピーター

ナルニアの王・女王となった者は 永遠に王であり女王だ

この世の終わる日まで賢く国を治めなさい」

みんな：「ピーター王ばんざい！ スーザン女王ばんざい！ エドモンド王ばんざい！ ルーシー女王ばんざい！」

～アスランいなくなる～

タムナス：「心配いりません また会えます」

ルーシー：「いつ？」

タムナス：「そのうち 突然現れたかと思えば いつの間にか 消えてしまう でもそれがあの方なんです
飼い慣らされたライオンじゃありませんからね」

ルーシー：「そうね... でも良い方だわ」

タムナス：「そうですね 良い方です」

第十一幕 フィナーレ

ナレーター：「こうして二人の王と二人の女王たちはナルニアをととても素晴らしく治め
彼らの統治は長く幸せでした そして年月は流れ 彼らも成長し大人になりました
彼らはナルニアで幸せに暮らしていました
ある時彼らは西の森に白ジカを狩りに出かけました
しかし彼らはそこで予想していなかったものを見つけたのでした」

スーザン：「あら！これ不思議だわ！」

エドモンド：「どこかで見たことあるような...」

ピーター：「夢の中で見たような...」

ルーシー：「夢の中の夢？... あ！イシヨタンス...」

ピーター：「ルーシー？」

ルーシー：「早く！こっちょ」

～現実世界に戻る～

ルーシー：「戻ってきたわ... 信じられない...」

エドモンド：「急いで戻らないと！」

教授：「たぶん無理だよ 同じやり方ではナルニアに戻れないと思うぞ」

ピーター：「え？ナルニア？ 知ってたんですか？」

教授：「まあな」

スーザン：「もう戻れないのかな？...」

教授：「大丈夫！ またいつか戻れるさ ナルニアの王・女王となった者は 永遠に王であり女王だからね
でも戻りたいって思っていないときに ひょいと 戻れるのさ
だから むやみに他の人にナルニアの話をしちゃいかんぞ
同じ体験をしている人ならいいがね」

ルーシー：「どうやってわかるの？」

教授：「見ればわかるさ だいたいそういう人は 変なことを言ったりするからね
目を開いていなさい」

2025/09/04